グローバル通信

特集　高校模擬国連全国大会

2017/11/24

NO.51

高校模擬国連全国大会最優秀賞
2018年5月　国際大会（ニューヨーク）出場決定!!

１１月１１日（土）・１２日（日）に渡って「第１１回全日本高校模擬国連大会」が渋谷の国連大学で開催され、全国から書類審査を通過した８６チーム１７２名が出場しました。本校からメキシコ大使として出場した高２島村龍伍君、高１山田健人君が見事にＡ議場最優秀賞を獲得し、他の５校と共に来年５月にニューヨークで開催される国際大会へと駒を進めることになりました。

校長先生と記念撮影　左から、山田君、島村君

模擬国連とは生徒が担当国の大使になり切り最大限国益にかなうように他国と交渉を重ね、それを決議文という形で表現します。今回の議題は「ジェンダー平等」で、公式スピーチは英語で行われ、決議文も英語で書きますが、交渉は日本語で行われます。英語の得手不得手よりも交渉力がものを言う部分もあり、２名のペアが協力しながら決議文にいかに多くの国の意見を反映させることができるかがカギとなります。本校の２名はうまく役割分担をしながら、終始会議をリードしていた点が評価され今回の受賞につながりました。これまで練習会議にも何度も参加し、事前の地道なリサーチ活動を綿密に実行した努力を称えたいと思います。（グローバル部顧問）

高校２年６組　島村　龍伍

模擬国連とは、参加者が二人一組のペアを組み、国際連合に派遣された一国の大使となり、一つの国際問題について担当国の立場について情報を集め、自国の政策の指針を考え、国益を背負った各国大使の立場から議論をし、他国の大使とともに政策を折衷、決議案を作成する事によって国際問題の多角的視点からの理解やその複雑さを理解するとともに、交渉力や論理的思考力、英語力の向上を目的とする活動です。担当国発表から会議当日までの一ヶ月半の準備期間の中で、各参加者がどのように時間を使うかは定められていませんが、国連決議を読んだり、公式発言をたどるリサーチをかなりの期間行います。それに基づき自国の議題における立場を確定させ、(担当国から見た）世界の理想状態と現状の架け橋となるような政策を打ち出していきます。

模擬国連の一番の特色は、自分の個人的見解とは必ずしも一致しない担当国の意見を述べつつ、他国の大使との妥協点を見つけ、自分の担当国にとっての最大の利益に結びつける、ということを目的とすることに

由来すると考えています。例えば、核軍縮でのロシア大使になることを考えてみましょう。日本に住む人のマジョリティからすると、核は廃絶すべきものでしょう。一方、ロシア政府が兵力としての核を重要視しているとしたら、ロシア大使として、その旨主張しなくてはなりません。加えて、世界の大多数を占める非核保有国と何らかの核軍縮合意に達せられなければ、ロシアは国際社会の大多数から非難の対象となるため、そのバランスを探ることも大使としての使命です。今の世界には自分の視点以外からの見え方があるということを自覚することも面白みの一つですし、妥協点を見出すことを目指す点で、ディベートの「打ち負かす」というよりかは「すり合わせる」に近い、より人間的要素が加わるところにあることも醍醐味だと言えます。相手を一方的に論破することは交渉とは程遠く、むしろ、異なる意見にも耳を傾ける姿勢を見せつつ、いかに相手の意見と自分の意見の中間点をみつけ、意見を折衷するかというところがポイントなのです。模擬国連では、先に述べた情報収集・分析能力・論理的思考力に加え、自分の考えないしは自分自身をプレゼンする力までもが磨かれると考えています。

模擬国連の活動に精力を注いだこの一年間、自分の見える世界が大きく変わったように思えます。それは、勿論外の世界に向けて「多角的視点」を持つようになったこともありますが、それ以上に、自分自身をプレゼンすることを通して、内に向けての確固たる視点が築かれたことが特に重要だったと考えています。僕は今まで自身を「論理に強い人間」と評価していましたが、模擬国連での数々の出会いを通し、その自分像は崩れ、新しいアイデンティティを形成するに至りました。自分の口から出る言葉の力であったり、人間関係についての力であったりと、模擬国連の対人要素によって初めて引き出された面が、実は自分の強みなのではないか、という自己の再発見をしたのです。引っ越しなどに伴う環境の変化によって、僕は幾度となく自己の再発見は行なってきましたが、強みが変わる、という経験は初めてであり、これからも模擬国連から得られるものが多くあると期待されます。

全国大会という大きな関門を突破し、グローバル部創部以来の願いであった世界大会へとコマを進めることが可能となりました。世界大会と日本大会の様相はその大会形式、参加者のバックグラウンドにおいて全日本大会とは大きく異なるため、他の派遣団メンバーと一丸となって、再発見した自己を武器に全力を尽くす所存です。

高校１年４組　山田　健人

私たちが参加した全日本高校模擬国連大会は、 今年で第１１回目の開催となりました。高校模擬国連の最高峰の大会であり、優秀な出場者は、主催者であるグローバル・クラスルーム日本委員会及びユネスコ・アジア文化センターの支援のもと、ニューヨークで開催される高校模擬国連国際大会への日本代表団に選ばれます。

近年は、エントリーするチームが増加しており、参加自体が困難な大会です。大会前には厳しい書類選考が課されます。今年の選考には１５６校・２３３チームのエントリーがあり、その中で８６チームが大会への参加が認められました。ただし、各校２チーム計４人までのエントリーが認められるため、多くの学校においては、 校内で出場者を決めるための何らかの選考を行わなければならず、実際の希望者はさらに多いと推測されます。大会に参加した８６チームの中から、最優秀賞及び優秀賞を受賞した６チームが世界大会への出場権を得ることができます。

海城は最近数年連続で全国大会への参加を果たしていますが、惜しくも世界大会への参加の夢は叶っておらず、本チームの最優秀賞獲得により、初出場を果たすこととなりました。

本大会の議題は「人権とジェンダー平等」でした。ジェンダーとは、文化や社会によって形成される性の

ことを指しますが、この議題を各国の大使として議論することは極めて困難なことでした。例えば、男女平等を考えるときに、平等とはどのような考えを指すのかは各国によって異なります。生まれた性に関わらず、全く同じ機会の元に生きられることが平等と考える国もありますが、女性差別的な慣習が根強く残る国もあります。さらに、ＬＧＢＴの人々の権利をどのように保障するかに関しても、同性婚を完全に認めている国もある一方で、同性愛に対して死刑を課す規定がある国もあります。そもそも、ＬＧＢＴの人々の権利の推進に関わる「性的指向・性自認」の議題に関しては、国連総会において議題として採択されたことがありません。ジェンダーは、各国の文化に深く根ざしたものです。各国の文化を頭ごなしに否定することはできず、また、交渉による妥協で、文化を変える、ということも考えにくいです。参加者らは、自らの担当する国の慣習や文化を、その国の人であるかのように理解した上で、ジェンダー平等の理想状態やその達成のためになされるべきことを考え、さらに会議においては、国の立場を守りつつ、他国との交渉で決議や宣言をまとめなければなりません。

国連の決議は、法的拘束力を持ちません。このため、立場が違っていても、交渉によって全ての国が納得できる決議が、国際社会に総意として採択されることに意味があります。

このような状況の中で、各国が自らの国の立場ばかりを述べていても、会議全体の成功にはつながりません。十分な議論を経ずに内容の強い決議の案が作成されると、納得できない国も生じ、結局決議は全会一致で採択されず、国際社会へ強いメッセージを発することはできません。それは成果ではなく、後退を生むことになりかねません。一方で、全会一致を目指すあまり、内容を薄めていくにつれて、その決議の持つ意義は失われていきます。このことは、ジェンダー平等という議題の特性上、今までに経験した他の会議以上に、難しい点となりました。

大会当日は、ＬＧＢＴの人々の権利の積極的な擁護を求める国々、イスラーム圏の国々、女性差別的な慣習が残る国々、などスタンスの違いが鮮明に現れ、議論の収拾がつかない状態が危惧されました。しかし、粘り強い交渉により、全会一致には至らなかったものの、イスラーム圏やアフリカの国々、国内でＬＧＢＴの人々の権利を認めている国々が、共同で宣言案を提出することになりました。

全員が納得して議論を終えることは、非常に難しいことです。しかし、本大会を通して、それは全く不可能ではないことだと感じました。それは、各国が交渉のテーブルについているからです。立場の違いこそあれ、世界全体で目指したいこと、目指すべきことがあると思うからこそ、議論ができるのです。この議題に即して考えると、各国が平和を希求しているから交渉ができる、とも言えます。過去の戦争からも容易にわかるように、人権が保障されない社会は、平和な社会には繋がらないため、人権の尊重は世界全体として共有しうる理念なのです。

国の立場を守りつつ合意を形成する中で、国際的な議論で決まることは、確かに、多くの場合、小さな前進にしかなり得ません。あるいは、交渉とは国の意見を足して２で割っただけだ、などと揶揄されることもあります。今会議においても、 ジェンダー平等に対して、たった０．１歩だけ前進した、というのが現状でしょう。しかし、マイナスではありませんでしたし、その０．１の積み重ねが変革をもたらすとも考えられます。

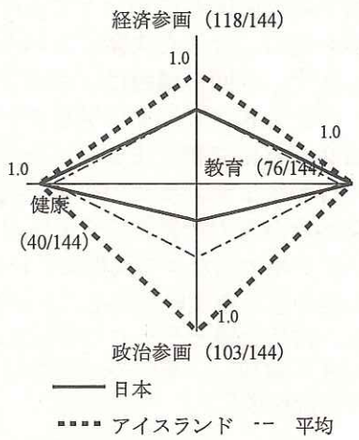
世界では、組織のリーダーがその組織のことばかりを考えたり、強硬な姿勢が国内で評価され、交渉のテーブルにつくことを渋ったりする動きが見られます。しかし、国連は喧嘩や争いの場ではありません。交渉を行うこと、誠実に話し合おうとすること自体に、意義があります。その上で採択された成果物には、大きな意味があります。

議題を深く捉え、立場の違いを乗り越えて当日も誠実に交渉を続けることは、確かに困難なことではありました。しかし、問題はどのようなところにあるのか、担当国や世界にとっての理想とは何なのか、どうすれば合意に至れるのか、深く考え続けられたことは大きな財産となりました。来年５月に開かれる世界大会においても、国連や国際的な話し合いというものを体現するかのように準備、当日の行動を進めていきたいと思います。

「ジェンダー平等」について

「高校模擬国連全国大会」開催時に、テーマに従って基調講演が開かれる。今回は外務省の北郷恭子氏（総合外交政策局女性参画推進室長）が招かれ、「持続可能な開発目標（SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS)」の GOAL ５「ジェンダー平等を実現しよう」について、ご自身の外交経験を通しての興味深いお話しがあった。中でも、「ジェンダーギャップ指数」は、最近報道はされていたが、改めてその実態を知り、驚かされた。

「ジェンダーギャップ指数」とは、「世界経済フォーラム」が男女の格差を国別に数値で報告するもので、今年は 11 月２日に発表された。それによると、日本は世界 144 カ国中 114 位（前年は 111 位）であった。因みに１位はアイスランドである。この序列は「政治参画・経済参画・教育・健康」の分野でどれだけ女性が活躍しているかを数値化して決定していく。それによると、日本が世界に誇れるのは、識字率・基礎教育在学率・中等教育在学率・健康寿命の男女比であった。一方極めて劣るのは、国家代表の在任年数・幹部･管理職での男女比などであった。文化の違いがあるのでなんとも言えない部分もあるが、やはり社会進出の点において劣るようである。（右の図はやや見づらいので、外務省のホームページなどで検索すると良いでしょう）



また北郷氏は「国際女性会議 WAW」について触れられた。トランプ大統領の愛娘イヴァンカ氏が参加した会議である。マスコミは、この会議での氏の発言はあまり取り上げず、ファッションのことばかりであったことを嘆いていた。幾つか大切なことを述べた由である。（確かに私の耳目にも触れなかった）こんな所から日本社会は変わらなければならないのかもしれない。因みに、日本の女性の結婚可能年齢、１６歳も国際的には批判の対象だとのことであった。（引率教員の雑感）

ホストファミリー募集（AFS 日本協会）

AFS は本校の高校生も毎年複数名がお世話になっている高校留学を手伝ってくれる公益財団法人です。そこから、海外の留学生を迎えてくれるホストファミリーの募集依頼が来ました。４週間、６ヵ月、１年といったコースがあるようです。関心のあるご家庭はグローバル教育部にご連絡下さい。詳細についてお伝え致します。